

高鷲小学校で授業研究会

5月～7月にかけて、高鷲小学校で授業研究会が計3回行われ、本校職員も7名参加しました。7月5日の授業研究会では、佐藤学先生の講演会もありました。今回は研究会および講演会のことを含め報告します。小学校での取り組み・実態を知ること、高校にも還元できるかと思います。夏に小中高合同交流会が、また小・中学校での授業研究会がある予定ですので、その際はぜひ参加してください。今回の報告と合わせ、昨年度での探究通信番外編も参考にしてください。

<授業時の工夫>

1. 授業が始まり、問題と前回のまとめ(四則演算の順番)を示し、「はじめてください」の一声でグループ学習(協同的学び)がはじまりました。

・人の集中力は、もっても開始10分だと言われています。まず、グループ学習をすることで、学びに対するスイッチを入れることが大切だと感じました。

<グループ学習のポイント>

① 聴き合い・学び合いにする。

わかった子、できた子がわからない子に“教える”ではなく“どこがわからないか”ときき、わからない子から“ここがわからない”とききことができることが大切

② 4人グループで行う。

一人で考える、仲間と考えるが一番しやすい人数でやると効率的に

③ わからないがイエスの環境づくり(聴き合う関係づくり)

児童が笑顔でわからないといえる環境に驚きました。本校の生徒もわからないと言える生徒もいますが、互いに共有できる環境づくりが学びやすい環境になるかと思いました。

2. 時間を区切って児童から困り感を共有 → 改善 を繰り返す

・困り感を児童から聞く、あるいはわかったことを聞き出す

みんなの“わからない”がどこかで“わかる”に変わり、最終的には間違えやすいところなど教師が押さえたい部分を児童が自ら学べる環境になっていると感じました。

3. ジャンプ問題へどう向かうか

“基礎から応用”を理解する児童もいる反面、“応用(ジャンプ問題を)しながら基礎”を理解する児童もいることを学びました。具体例から原理をつかませる等いろいろと工夫ができそうです。

4. 算数での操作的意味と量的意味の解離について

計算方法(結果)を求めて覚えている生徒が少なからずいると感じることがあります。

例:速さや体積について計算方法はわかるけど、その操作の意味がわからないこと

(概念(量的意味)がわからない → 計算はできるが内容はわからない → 応用ができない)

授業では結論のみを伝えることもできますが、過程や本質を考えさせることが重要だと確認できました。

5. 教師が話すのは授業の10%～20%

今回の研究授業もそうでしたが、教師が話す時間はトータルでも10分程度でした。高校では、必要に応じて講義式の授業も大切ですが、生徒が考える時間(演習する時間)を確保し、教師が探究するのではなく、生徒が探究する時間を確保することが、生徒の成長に繋がるのかもしれない。

今回の研究授業でのキーワードは、「探究」と「協同」

教師の仕事は、①学びのデザイン ②学びのコーディネート ③学びのリフレクション

とのことでした。「生徒が主体となって学ぶ環境づくりを高校で行うには」と考えたとき、課題は多いとは思いますが、高校でも活かせることを小中学校から吸収していけたらと思いました。本校でも学び合いを取り入れている授業の場面は多くあります。小中高合同教科部会や本校での授業研究会をとおして教師も学び合いができたらと思います。